様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：３４３１０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２３９５

研究課題名（和文）バイフの詩的実験と16世紀ギリシア古典学：lyrique概念の発生と展開

研究課題名（英文）Baif's Poetic Experimentation and Greek studies in sixteenth-century France : introduction of the notion of " lyrique" and its development

研究代表者
伊藤　玄吾（Ito, Gengo）

同志社大学・グローバル地域文化学部・准教授

研究者番号：７０４６７４３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、詩の研究において欠かせないギリシア起源の"lyrique"という概念がフランス・ルネサンス期に導入された過程をたどり、当時の古典学者たちと一部の博学な詩人たちがいかにその概念を理解し（または誤解し）た上で、フランス語において目指すべき新たな詩の方向性を定めて行ったのかを考察するものである。当時の主要な古典文献学の成果を丁寧に検証するとともに、最もギリシア語との関わりが深い博学な詩人であり、韻律やリズム・音楽に至るまでよりギリシア的なあり方に近づこうと試みたジャン＝アントワーヌ・ド・バイフの作品群を分析し、フランス詩史における"lyrique"の展開の一つの重要な水脈を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
詩の研究・批評において"lyrique"という概念は欠かせないものであるが、近代以降「抒情詩」と訳され、理解されてきたものと、それ以前の世界において理解されていたものとは必ずしも同じものではない。本研究では、音楽・舞踏・宗教的儀式や演劇のパフォーマンス性と切り離すことのできない古代ギリシア的な意味でのlyriqueのあり方について、古典復興の時代である16世紀フランスの詩人たちがどのように理解しまたは誤解し自らの新しいlyriqueを創り上げていったのかを、当時の古典学者たちと詩人たちの密接な関わりを探りつつ読み解いており、古典学が新たな時代の創作活動へと有機的に繋がる一例を示す研究である。

研究成果の概要（英文）：The notion of "lyrique" is indispensable for any studies on poetry. The present research examines the process of introduction of this cardinal literary concept and its development in sixteenth-century French Literature, in analyzing how French humanist scholars and some learned poets understood or misunderstood the Greek word "lyrikos" and how, in particular, Jean-Antoine de Baif, one of the most erudite poets of the French Renaissance, inspired by classical Greek studies of his era and profoundly attached to the greekness of the "lyrique", tried to introduce a important innovation based on a reform of metrical and rhythmical system in French verse in close relation to music.

研究分野：フランス文学

キーワード：フランス・ルネサンス抒情詩　フランス人文主義　ジャン＝アントワーヌ・ド・バイフ　アドリアン・チュルネーブ　フランスのギリシア古典学

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

フランス詩を研究する上で、"lyrique"という概念は避けて通れないものであるが、このギリシア起源の詩概念は、フランスにおいては 16 世紀の古典文献学の隆盛をもって初めて本格的に導入された。その概念が当時の主要なギリシア古典学者たちによって実際にどのように理解され（もしくは誤解され）、またそこから当時のフランスの詩人たちが何を吸収し、自らの創作につなげていったか、ということは 16 世紀詩史の根幹の部分に触れる重要な問題なのだが、実はその重要性に見合うだけの詳細な研究が十分なされてきたかというと必ずしもそうではない。確かに近年においては、ホラティウスを中心とするラテン文学経由の lyrique 概念の展開についての Nathalie Dauvois の研究（*La Vocation lyrique. La poétique du recueil lyrique en France à la Renaissance*, 2010）や、ルネサンス期フランス詩人の中でもっとも象徴的な存在であるロンサールにおける lyrique 概念の成立とその展開についての Benedikte Andersonn の研究（*L'Invention lyrique. Visage d'auteur, figures du poète et voix lyrique chez Ronsard*, 2011）などの重要な研究が出てきているが、それらの研究においてもまだ十分探求されていない、もう一つの重要な水脈があり、それはプレイヤッド派の詩人の中でも最もギリシア語の素養のあったジャン＝アントワーヌ・ド・バイフにおける lyrique の理解とその実践である。彼は同時代の詩人たちの誰にも増して多様な角度からギリシア的な lyrique の理想に近づこうとし、韻律・リズム、そして音楽との関係に至るまで様々な詩的実験を行なっている。バイフが当時の古典学の成果を具体的にどのように取り入れ、自らの創作につなげたのかを、より詳細な形で明らかにすることによって、フランスにおける lyrique 概念の発生と展開を考察するうえで重要な軸の一つを明らかにすることが必要であろうと思われた。

２．研究の目的

西洋詩の研究・批評において lyrique の概念は欠かせないものであるが、日本語で一般に「抒情詩」と訳され、論じられている 19 世紀以降の lyrique 理解と、この語がフランス語に導入された 16 世紀当時の理解の仕方は決して同じものではない。本研究は、古代ギリシア的な意味での lyrique のあり方―楽器リュラ lyra に合わせて歌われるものとして、音楽、舞踏、宗教儀式や演劇のパフォーマンス性と切り離すことのできない lyrique としての詩―を追求した詩人ジャン＝アントワーヌ・ド・バイフの作品群を、その背景にある 16 世紀フランスのギリシア古典文献学の状況と精密に照らし合わせ分析・考察し、それらの作品群がフランスにおける lyrique 概念の独自の展開の可能性を持つものであったことをできるだけ実証的な形で示すことを試みるものである。またそこから、lyrique の概念を用いてなされる一般の詩の研究・批評に対しても新たな視点を提供することを目的とした。

３．研究の方法

本研究は 16 世紀中期のフランスのギリシア古典学の展開と、ジャン＝アントワーヌ・ド・バイフの詩作活動の関係を lyrique 概念の理解という視点から実証的に分析し、考察していくものである。

（1）したがって、研究の第一段階としては、バイフが利用しえた 16 世紀初期から中期にかけての主要なギリシア古典文献学に関する諸文献、とりわけ各種のギリシア作品のエディションや注解類、古典学研究に関する雑記類を丁寧に検証し、当時のフランスのギリシア古典文献学における lyrique 理解の諸相を探る作業を行なった。

（2）続いて、そうした古典文献学の成果を詩人バイフがどのように理解し、自身の詩作活動の中にどのように取り入れて行ったのかを、バイフの具体的な作品群の分析に基づき考察することで、16 世紀フランス詩史における lyrique 概念の導入と展開のもう一つ重要な水脈を明るみに出していくことを試みた。

４．研究成果

（1）研究の第一段階として、バイフが使用したと考えられる当時のギリシア語テクストのエディション、ギリシアの韻律に関する当時の書物、その他彼が利用しえたと思われる古注、バイフの身近にいたフランスの古典学者の注解群を、フランスの諸図書館を中心に徹底的に調査し、分析した。とりわけバイフがドラの指導の下、古典文学を学びつつ、詩人としての最初の修練を行っていた時期に、パリの彼の学び舎のすぐ側で出版され、大いに活用したと思われる以下の文献については丁寧な検討の対象とした。

1. *Qeokrivtou eijduvllia*, *Theocriti Idyllia*, Paris, Guillaume Morel, "ad scholas Coqueretias", 1550.
2. *Σοφοκλέους Τραγῳδίαι, […] Δημητριου τοῦ Τρικλινιου περὶ μέτρων οἷς ἐχρήσατο Σοφοκλῆς, περὶ σχημάτων, Σχόλια*, Paris, A. Turnèbe, 1553.
3. *Γνωμολογίαι παλαίτατων ποιήτων*, Paris, A. Turnèbe, 1553.

これらの校訂版テクストの作成を主導したのは 16 世紀中期のフランス古典学を代表する学者であるアドリアン・チュルネーブである。彼の lyrique 理解が、彼の出版テクストの選択にも大

きく関わっており、それはまた、彼の指導のもとに古典学を修め、旺盛な出版活動を行うことになるアンリ・エティエンヌの次のような重要なギリシア詩集成に密接に繋がっている。

Pindari Olympia, Pythia, Nemeam Isthmia. Caeterorum octo lyricum carmina..., Paris, 1560.

以上のことからアドリアン・チュルネーブとその周辺の古典学者たち（ドラやトゥッサン、またフランス外ではメランヒトンやカメラリウス、ゲスナーやブキャナンなど）の lyrique 観を一つ一つ丁寧に検証していくことが必要と考えられたが、彼らはそれぞれこのテーマについて総合的で網羅的な考察を行っているわけではないので、各エディションの注解や序文、もしくは文献学に関する雑記や覚書類（例えばチュルネーブの *Adversaria*、カソボンの *Theocriticarum lectionum libelllus* など）を読み解く中から、彼らの lyrique 観をあぶり出していくしかない。本研究の最初にそれらの文献の分析と整理を試みたが、その量は膨大であり、概念的な議論と文献学的な細部の議論とが複雑な形で混淆しているため、そこから必ずしも明快なヴィジョンを取り出すことは容易ではなかった。よって本研究においては、バイフが実際に翻案をしたギリシア語テクストに関わる証言の中から示唆的な内容を取り上げるにとどめ、より大きな枠組みでの議論、すなわち 15 世紀から 17 世紀前半に至るギリシア古典学内での lyrique 概念をめぐる主要な議論については、古典文献学史家 Pascale Hummel の *Philologica lyrica*（1997, p.155-236）を活用しつつ整理を行った。

なお、16 世紀の様々なエディションや古典学者の雑記・覚書類とバイフのテクストを綿密に比較検討する中で見えてきたことは、印刷されてない情報、例えば写本もしくは口伝の形で師から弟子に伝えられたテクストの異同やその解釈の重要性である。バイフが試みたギリシア語テクストの翻案において、16 世紀に出版されたいかなる印刷本とも異なる読みが基礎となっていると思われる箇所が見受けられた。本研究では一つ一つのそうした異読の正確な起源を突き止めるには至らなかったが、少なくともバイフによるギリシア詩の翻訳や翻案の背後には、印刷本には必ずしも現れない、おそらくはドラやチュルネーブによる教育や研究の現場において口頭で伝えられたに違いない、非常に高度な文献学的な考察が流れ込んでいることがより明快になったと言える。

（2）以上のように lyrique 概念をめぐる 16 世紀ギリシア古典文献学の状況を整理する研究を行った上で、本研究では次の段階として、詩人アントワーヌ・ド・バイフがそれらのギリシア古典学研究を踏まえ、どのようにギリシア的な lyrique を理解し、それを自らの詩作活動にどのように取り入れ、独自に展開したかということを実際の作品に即して分析していった。中でも特に重要と思われた 3 つの作品の分析と考察をフランス 16 世紀文学研究雑誌『ロンサール研究 Revue des Amis de Ronsard』にそれぞれ論文として発表した。

①ギリシア悲劇ソポクレスの『アンティゴネー』のバイフによる翻案作品（*Antigone*）におけるコロス（合唱歌）の部分の扱いに関する分析と考察。ギリシア悲劇作品においては、登場人物の対話の部分と異なり、合唱隊が歌い踊るコロスの箇所はとりわけ lyrique な性格を持つものとされる。バイフの作品におけるコロス部分の翻案の方法とその特異性を、彼の lyrique 理解と関連付けながら、上記のチュルネーブ版のソポクレスのエディションを参照しつつ、また 16 世紀のルイージ・アラマンニによる重要なイタリア語訳とも比較しつつ、分析・考察した（論文「ジャン＝アントワーヌ・ド・バイフ『アンティゴーヌ』におけるコロスの問題」）。
② lyrique を叙事詩との対比において考えるために、ヘレニズム期に流行し、バイフも好んで翻案を行った「エピュリオン」と呼ばれる、叙事詩と lyrique の両方の要素を含む中間的ジャンルに属する作品群を分析した。特にヘレニズム期詩人モスコスの作品の翻案であり、バイフのデビュー作でもあるフランス語詩『エウローペーの略奪 *Ravissement d'Europe*』、そしてバイフ自身がギリシア語で書いた同じジャンルに属する作品『メダーニス』を分析し、ギリシア詩での詩作とフランス語での詩作の密接な関連性を指摘し、そこにおける lyrique 的な要素の展開の重要性を考察した（論文「ジャン＝アントワーヌ・ド・バイフと”エピュリオン”––『エウローペーの略奪』と『メダーニス』を中心に––」）
③知恵文学・教訓詩は lyrique と古来密接な関係にあり、またバイフの理想はまさに知恵の言葉、韻律、リズム、音楽が融合する詩の創作であった。その理想の実現の試みとして、バイフがギリシア詩の韻律法を参考にしたヴェール・ムジュレ vers mesurés という新しい詩法を導入した作品群の中でも、古代ギリシアの教訓詩とヘブライ的な知恵文学が融合したテクストである『偽ポーキュリデースの教え』を分析し、そこに 16 世紀ギリシア古典文献学の深まりが、新たな lyrique の創作へと結びつく一つの典型的な例を読みとった（論文「ジャン＝アントワーヌ・ド・バイフの vers mesurés と教訓詩––*Étrénes de poézie fransoeze an vers mesurés* (1574)における「（偽）ポーキュリデースの教え」の翻訳をめぐって––」）。

（3）一方、こうしてバイフの作品を読み解きつつ、この詩人の lyrique 概念の展開を考察する中で、ギリシア的な要素と同時にもう一つの決定的に重要な軸として、聖書の『詩篇』に典型

的に見られるヘブライ的な要素との関係の考察が不可欠であることもより明確になってきた。16 世紀はギリシア古典文献学とともにヘブライ文献学が発展した時代であり、バイフの詩作活動の非常に大きな部分を占める詩篇翻案も、そうしたヘブライ文献学の成果と切り離して考えることはできない。16 世紀のフランスにおけるギリシア古典学との関連で lyrique 概念の展開を考察した本研究の成果は、今後は 16 世紀フランスのヘブライ文献学と lyrique 概念の展開の関連をめぐる研究によって補充され、また再検討されることが必要である。それによって、バイフに象徴される 16 世紀フランス詩のもう一つの重要な水脈がより十全な形で明らかにされるだろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　5　件）

①伊藤玄吾、「ジャン＝アントワーヌ・ド・バイフの vers mesurés と教訓詩––*Étrénes de poézie fransoeze an vers mesurés* (1574)における「（偽）ポーキュリデースの教え」の翻訳をめぐって––」『ロンサール研究』、日本ロンサール学会、査読有、32 号、2019 年 8 月刊行予定。

②伊藤玄吾、「ジャン＝アントワーヌ・ド・バイフと”エピュリオン”––『エウローペーの略奪』と『メダーニス』を中心に––」、『ロンサール研究』、日本ロンサール学会、査読有、31 号、2018 年、pp.51-74

③伊藤玄吾、「ベンボ『俗語論』の 16 世紀中期フランスにおける受容に関する一考察–ジャン＝ピエール・ド・メムの『イタリア語文法』を中心に」『天野惠先生退職記念論文集』京都大学文学部イタリア語イタリア文学研究室、2018 年、pp. 67-83

④伊藤玄吾、「フランス・ルネサンス文学における隠蔽と解読」、『ロンサール研究』、日本ロンサール学会、査読有、第 29 号、2016 年、pp. 43-47

⑤伊藤玄吾、「ジャン＝アントワーヌ・ド・バイフ『アンティゴーヌ』におけるコロスの問題」, 『ロンサール研究』、日本ロンサール学会、査読有、第 28 号、2015 年、pp.1-31

〔学会発表〕（計　3　件）

①伊藤玄吾、「ジャン＝アントワーヌ・ド・バイフの vers mesurés と教訓詩：*Étrénes de poézie fransoeze an vers mesurés* における「（偽）ポーキュリデースの教え」の翻訳をめぐって」 、日本ロンサール学会夏期大会、びわこリトリートセンター、2018 年 8 月 13 日

②伊藤玄吾、« J.-A. de Baïf et le genre "epyllion" -du *Ravissement d'Europe* à *Medanis*.» 、日本ロンサール学会夏期大会、びわこリトリートセンター、2017 年 8 月 11 日

③伊藤玄吾、「エラスムスからラブレーへと至る人文主義の一潮流とユダヤ」、京都ユダヤ思想学会第 10 回学術大会シンポジウム「ルネサンス・人文主義・宗教改革とユダヤ–ルター『95 カ条の論題』500 周年」、同志社大学、2017 年 6 月 24 日

〔図書〕（計　1　件）

①（共著）篠田勝英・海老根龍介・辻川慶子編『引用の文化史：フランス中世から 20 世紀文学におけるリライトの歴史』水声社、2019 年、372（伊藤玄吾「ルネサンス期のリライトに関する一考察–エラスムスの"コピア"そして"パラフラシス"」pp. 41-67）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：

権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。